

県民環境キャンペーン  
も  
**地球の守り人**  
減らそう!CO<sub>2</sub>



新潟は雪が多いから  
水が豊かなんだ

きょうは節水の日

手洗いの時は水を止めるようにする。(新潟市立新津第一小学校 4年 笠原 健斗君)

今回は3

日本海と山河に囲まれた本県は水が豊かにあり、私たちはその恩恵を受けて暮らしている。水は生命の源。生活に欠かせないからこそ、地球温暖化や水質汚染を進めてはいけない。地球の守り人は本年度、「つなごう未来へにいがたの水」というテーマで、さまざまな角度から水

水のあした

の環境について考えてきた。今回は総集編として、水問題に詳しいNPO法人加治川ネット21(新潟市)、国際協力機構(JICA)新潟デスクの佐脇奈都代国際協力推進員、上越教育大佐藤芳徳教授の3者に、新潟の豊かな水を守るために必要なことは何か一を聞いた。

どう守る ぶるさとの環境

篠田令子理事長(左)と若月学理事(右)



かじかわねっと21 1996年11月発足、2003年5月NPO法人設立。会員は個人約90人、団体約30。

「ふるさとの川をいつまでも美しく」という思いから、新潟市の加治川流域を中心に約15年間活動している。会の発足当初、加治川沿いは冷蔵庫などの家電製品やタイヤ、耕運機などのごみが不法投棄されていた。拾い集めたら2トトラック8台分ほどの量。その後ごみは減ったが、私たちの活動によってというよりも、法規制ができたからといえる。私たちの活動は微々たるものかもしれない。しかし、親子で参加する水辺イベントの開催や小中学校の総合学習を支援することで、川から遠ざかっている子どもたちがその素晴らしさをおもしろさに気付いてくれた。昔に比べると住民は自

NPO法人・加治川ネット21

然から離れて暮らし、集落の連携が薄れた。住民が環境に配慮した川の整備について考え共同作業をする中で、人と人の絆も深まるのではないかと。そうした活動を引き継ぎやっていた。加治川はともきれいな川だ。ダムからの放水により夏場でも水温が上がらず、アユが大きくならないようだ。人間にとって便利なことは動物にとっても良いことにはならない場合が多い。そこをどうしていくかが課題だろう。

住民が集まり 愛着わく川に

加治川には2カ所「天然プール」と呼ばれる新潟市が指定する公共遊泳場がある。加治川ネットでは毎夏「水辺の大楽校」というイベントを開催し、子どもたちが川で思いっきり遊んでいる。きれいな川に親しみ、川の香りやそこにすむ魚に触れる体験は、大人になっても大きな財産となる。川に集い親しむことで、ごく自然に愛着を感じ、環境を守っていく意識が生まれるだろう。



川遊びは おもしろいなあ!

新潟は水が豊か、という理由のひとつに降水量の多さが挙げられる。県内では海岸部を除いて雪がたくさん降るため、年間の降水量が多い。全国平均が年間約1700ミリなのに、対し上越市高田地区は約2800ミリで、12・1・2月の降水量が年間量の約40%を占めている。雪解け水が地下に浸透するため、県内は地下水

上越教育大・佐藤芳徳教授



先人に学び節水心掛けて

新潟は水が豊か、という理由のひとつに降水量の多さが挙げられる。県内では海岸部を除いて雪がたくさん降るため、年間の降水量が多い。全国平均が年間約1700ミリなのに、対し上越市高田地区は約2800ミリで、12・1・2月の降水量が年間量の約40%を占めている。雪解け水が地下に浸透するため、県内は地下水

の量が多い。きれいな溪流や湧き水が多いのは、地下水が豊富にあるから。地下に浸透する水が多いため、地下水が滞留する時間が短くなり、水に

さとう・よしのり 1952年生まれ。専門は自然地理学(水文学)。2009年から上越教育大副学長。

あまり物質が溶け込まず、きれいなまま地上に出る。また、春先に雪解け水で河川流量が増加する。これは、稲作に適した環境だ。3、4月に流量が増すことでダムやため池に水がたまり、水田にた

とだ。治水では、水害を防ぐため堤防や浚渫、分流が重要で、大河津分水などの放水路を建設し、利水だと、農業用水は発電に利用してから用水路に取り入れ、水道水ながら、きれいな水を守る。そして、水を汚さず意識を持つことも大切だ。地下から湧き出た水は蒸発して雲になり、や雪となって地上に降り注ぎ、再び地下水と循環していく。このサイクルの過程で汚染物質が溶け込み水質を悪くさせるのを知ることが、きれいな水を守るために重要だ。

輸入食材通じ 世界に関心を

JICA・佐脇奈都代 国際協力推進員



この食べ物をつくるのに 外国の水もたくさん使われているのね

青年海外協力隊としてバンングラデシュにいたとき、3日間バケツ一杯の水で過ごす経験をした。水のありがたみを体感した出来事だった。新潟は水資源が豊富。酒などもおいしく、水を大切にしている文化が根



さわき・なつ 0年生まれ。2009年2年間、青年海外協力隊としてバンングラデシュにいたとき、3日間バケツ一杯の水で過ごす経験をした。水のありがたみを体感した出来事だった。新潟は水資源が豊富。酒などもおいしく、水を大切にしている文化が根

付いていると感じる。一方で「湯水のごとく」という慣用表現があるように、日本では水は限りなく豊富にあるイメージが根強い。蛇口をひねれば安全な水が出てくることは当たり前で、水に対してもあると思う。東日本大震災や現状へのありがたみは、ともすると薄いかもれない。しかし、世界的に見れば、3人に1人が水不足の状態だ。途上国では、飲み水を手に入れるために変えていけなければならない。世界を視察して、日本の「当たり前」を伝える活動。09年から

多くのコストややしている地域。日本では当然環境は、世界共通「安全な水」を確保すること。会の重要な課題でもある。自分とは遠い存在かもしれない。卓上にある食材一つみても輸入が多く、それらめには多くの水を使っている。私たちがつなごう未来へにいがたの水を守るために必要なことは何か一を聞いた。